

政界回顧二十年

滿洲事變と國際連盟脱退(其の二)

北 吟 吉



一 バリ滞在

僕はアメリカで対日感情の動きを見た後ヨーロッパへ向つた。昭和七年十月の始めであつた。船はキューナード会社の「モリタニア」号で一等室を採つた。第一次大戦の際、米国の参戦の口実となつたルンタニア号の姉妹船で三万六千噸の相当なものであつた。大正八年米國より渡英した際の船は僅か一万六千噸の「バルチック」号であつた

し昭和十四年の第三回目の渡欧の際は五万噸の「ヨーロッパ」号といふ豪華船に乗つたが、「モリタニア」号は兩者の中間といへる。一等船客は日本人としては僕一人であつた。船中の遊び相手は全部英人であつた。誘はるゝ儘に連中とコリントゲームをやつた。始めて覚えたゲームである。英人は米人と同様バクチが好きと見えて、一回毎に一シルリングの銀貨を賭けたが、初心ながら、僕は賭運強く相当勝ち越した。

サーザンプトンに着く前に、何時に燈台の火が見えるか賭けたいが、一人不足してゐるから、貴方が加はつて呉れといふ。早速加はつたが、負けて一磅取られた。コリント・ゲームで備けたのを、吐き出した形であつた。船中の英人連は商人が多く、滿洲問題などは対岸の火災視してゐた。My businessでないといふ、あつさりしたものである。当時の米人ほど干渉癖がない。僕は英國へは上陸せず、フランスの

港から直ちにパリに向つた。大正八年の晩秋今や眞鴨の住人たる賀屋興宣とロンドンから一緒に来た汽車であつた。パリに就いて、ボストンのニコルス夫人の紹介のホテルに入つた。日本人が余り来ないホテルである。日本大使館へ赴いて長岡春一郎大使に会つた。恰も往年大東文化学院で一緒に教授をしてゐた塩谷温博士に邂逅し、二人で大使の晩餐に招かれた。翌日早大時代の同窓の高嶋唯之が領事の仕事をしておゐるので訪ねたら、奥さんも子供さんもゐて、毎日飯を食ひに来いと誘はれた。早速同君から下宿の世話をしてもらひ、毎日一回同君の宅へ出掛けて鯛の塩焼きで日本飯を食つた。

明治三十七年日露戦争の年上京して、早稲田で英独の二語は勉強したがフランス語は家庭教師に就かうと考へた。翌年大久保百人町に兄一輝と家を持つたら附近に幸徳秋水がゐた。幸徳に佛語の教師のことを頼んだら、外語出の大杉栄といふのがゐるから紹介しようといふ。彼が無政府主義者たることは知つてゐたが、紹介して貰つた。彼は堀保子さんと市ヶ谷に同棲してゐた。三ヶ月ばかり通つたが、大杉は下モリの癖に、フランス語は流暢で発音がとてもやかましい。たまり兼ねて止めた。早稲田の先生時代にも、片上天弦、吉江孤雁などと一緒に、同僚の商学部教授の宮島綱男に習つた。片上はロシア語の初歩もやつてゐた。後片上はロシアに留学し、吉江はフランスに留学して、其の道の大家になつたが、何れも晩学だつたから、どれほどマスタリーしたか、疑問である。僕は大正七年渡米してハーバート大学に入り、佛語のコースも取つたが、即成を考へ

て、学生の巖本君に頼んで、或る大学教授の娘だといふマグルーダーさんに個人教授を受けた。マグルーダーさんは後巖本君と結婚し、有名なバイオリニスト巖本マリコさんを生んだのである。大正八年ダートマス・カレッジに避暑中も同大学の講師ダンナム君に佛語を学んだが、暖めたり、冷したりするのと、英独二語が楽なので、自然此の方の書物を読むから、佛語は物にならなかつた。それで今度の旅行中には物にしようと、半歳パリに頑張つて勉強しようと思へた。ところが、松岡洋右が國際聯盟理事会への全権としてゼネバに乗り込む途中パリに来たので、そこへ行くことゝなつて佛語の勉強はまた妨げられた。佛語は前後三年もやつたが、新聞のレポートを辞引を片手に読む程度から上達しない。

パリでは結城素明画伯の弟の森田君が依然旭ガラスのパリ出張所主任をやつてゐるので、大正八年賀屋君と世話になつた如く、またまた世話になつた

パリ在住の日本人中第一のバリ通といつてもよい垢抜けした人物である。僕が東京出発の時わざわざ東京駅まで送つて呉れた故平福百穂画伯の絵が沢山森田君のところにある。訳を聞くと、平福さんは、大倉男の世話でローマで催された日本画の展覧会に、横山大観大智勝観等と行つて、帰りにパリに滞在して、フランス大使館で執筆を依頼され、日本からの用紙の到来を待つてゐた数ヶ月、森田君の所に滞在してゐたので森田君の処で絵を相当書いたのである。パリ大使館の百穂画伯の家鴨の絵は傑作である。

パリ滞在中は家庭教師と一緒に毎日「タン」や「マタン」等の論説を読んだが、米國で大騒ぎする程には佛人は満洲問題には関心を持たない。当時のフランスは英國を経済的に威嚇するほどに威勢が善く、遠くポーランド、チエコに威力を及ぼし、文字通りヨーロッパの強國であつた。唯隣りのドイツでヒットラー運動が益々熾烈になりつ

つてあつたのが、明日の不安を予報するだけであつた。

松岡洋右さんが巴里へ乗り込んだ日附は忘れたが、多分十一月の初めではないかと思ふ。影佐少佐の紹介で知つた海軍大佐岡野俊吉君とは非常に懇意になつた。岡野君は支那にゐたので有数な支那通であつた。僕はパリで英字新聞や佛字新聞を読んでゐたので、幾度か國際状態を語つた。同君は大に感謝してゐて、僕のバリ滞在を松岡に語つた。松岡は僕に会ひたいと岡野君を通じて知らせた。依つて同君をグラン・オテルに訪ふた。

こゝで一寸松岡と僕との關係を述べる。僕が始めて彼に會つたのは田中内閣の末期である。僕が日本新聞の論説を書いてゐた時不戦条約の「人民の名」の問題について大に論じ、殊に「人民の名」の誤訳を指摘した。僕は不戦条約其の物には反対しなかつたが、条約文は烈しく攻撃した。美濃部、立、兩博士、高木、蠟山、高柳教授にも大に唸

つてかゝつた。僕の議論の正しかつたことは、今でも確信してゐる。時恰も尾崎行雄さんが誰におだてられたか柄にもなく、之に就いて議會に質問書を出した。田中総理はこの答辯に苦しんでゐた。此の問題を起した張本人は田中内閣の外務大臣になり損ねた故本多熊太郎であつて、同県出身の中村啓次郎を使つて躍らしたので、不戦条約文を辯護した外務参与官植原悦次郎が伊東枢密顧問官の策謀で参与官を辞めさせられた。長州出身の慶大教授向井軍次が僕の不戦条約文の批判を称揚して同郷の田中総理に話した爲めか、政友会代議士故木下成太郎を通じて僕に會ひたいといつた。同代議士に案内されて、田中の靜養先修善寺の菊屋旅館に行つた。夕食にわざわざ取らしたといふヤマメの料理が出た。食事には前田米藏(法制局長官)吉植代議士、佐藤安之助少将、松岡洋右等が一緒にあつた。僕は客分として田中の側の正座に坐せしめられた。松岡とは此の時

が初対面だつた。夕食後松岡と小生とが六時間も語り続けた。半問のない男だとは思つたが、意気旺んなのが気に入つた。之が彼と親交を続ける契機となつた。其の後帝展の招待日に一度會つた。因に田中総理には、折角の御招きだが、誤訳の不戦条約文には答辯の余地がないと答へた。田中内閣も張作霖爆死事件で命且夕に迫つてゐたので田中さんは今度出直す時には、在郷軍人会のやうに、黨員を細胞組織にして磐石のものにせねばならぬと僕に打ち明けた。田中さんは小川平吉、三上忠造

兩氏から僕のことを聞いてゐたので、初対面から僕に非常に信頼を置いてゐたので、僕の主宰してゐた雑誌「祖國」の爲めに、帰京後金一万円をぼんと寄附して呉れて、この次には東京第五区から出馬せよ、僕が応援するとまでいつて呉れた。当時僕は政党嫌ひであつたから、政友会からは立たなかつた。松岡はパリのホテルで中食を御馳走して、僕のアメリカに於ける印象を聞

いたから、米人の質問を六種に分類して、一々之に對する僕の解答を伝へた。關東軍の出兵は條約上の權利で、滿洲事変は「分離運動」であり「自治運動」であり、滿洲國は支那本土よりも安定し、人民は繁榮してゐるから、中央政府の勢力が及ぶことは滿洲の安定を害するし、日本の実力は東洋全休の安定と繁榮とに欠くべからずと辯解する外はないと述べた。更に僕は英國は不戦条約に保留を附して、自衛権の発動には武力行使も必要であるとして、或る地域に保留を求めたのに、日本が何等の保留を爲さずに條約をその儘批准したのが失態でゼネバで相当苦しむだらうと附言した。松岡は聯盟の理事会で十三対一、総会では四十三対一で日本は排撃されたが、聯盟規約に背馳するとの非難は兎も角、世界の輿論に反對するとの攻撃にはどう答へるか問うたから、僕は、「世界の輿論は變ることがある」"The world opinion may change"と答へるより外はあるまじ

といつた。彼はゼネバと一緒に行かうかと誘つたが、僕はフランス語を勉強したいと思つてゐたので、返事はしなかつた。

其の後、岡野大佐と一緒にゼネバへ行かうと熱心に誘つて呉れたので、行かうと考へた。路銀はあるが、ホテルでは室代が高いから躊躇してゐたら、岡野は室代だけは松岡に持たせるから行かうと誘つたので、室代だけ千円出して貰ふことにして、残りは自弁で行くことにした。

二 國際聯盟理事會傍聽

國際聯盟理事會は十一月十日(或は廿日であつたかも知れない)からゼネバで始まつた。僕は一行より一日後れてパリを立つた。汽車は日本人として一人かと思つてゐたら、車掌がやつて来て、隣の車に日本人が二人乗つてゐるから會つてはといつたので行つて見たら支那人であつた。車掌が日本人と間違へたのか、日本人といふと通り

がいゝので、そついつたのか解らぬが兎も角も不審に堪えなかつた。

ゼネバに着くと日本人は大げさの陣容であつた。海軍から永野修身中将、長谷川清中将、外に少将一名、岡野君外大佐一名、少佐一名、陸軍からは建川中将、石原莞爾中佐、土橋中佐、影佐少佐、パリの大使館附武官笠井少将等が来てゐた。外交官は全権松岡の外駐英大使松平、駐佛大使長岡、駐白大使佐藤尚武、外に伊藤述史、天羽英二東郷茂徳、笠間昊雄等であつた。伊藤、天羽、東郷の三君は第一回の渡歐の時から知り合ひで、実に懐しく感じた。伊藤君は松岡全権の参謀格で適在適所実に能く働いた。語学は英独佛伊に通じ、殊に佛語は達者であり、伊語も相当のもので、懐刀としては無二の適任であつた。松岡が大演説をやる前夜にはよく、伊藤、岡野大佐と僕とが松岡の招待で食卓を囲んで談論をかはした。山下龜三郎氏の寄贈といはるゝ白鹿とわざわざパリから出張した日

移民は移民先の官憲や国民に貢献した従つて、世界征服を企てたなどいふ田中メモリアルは偽作なることは世界の識者の一致して認めるところだと述べた。

僕は松岡代表の英語演説は始めて聞いたが、十数歳の時渡米したげあつて英語は実に流暢であるが、カリフォルニア調で品のよいものではなかつた殊に、宗教、哲学、文学の造詣が乏しいので、滔々数万言でも後世に残るべき名言は一言もなかつた。顧代表も演説も流暢ではあるが、気品のある方でもなく、又迫力に乏しかつた。之に比すれば、後日の顔真慶の演説はケンブリッジ仕込みである爲めか、壯重で人に迫るものがあつた。顔も顧代表のような婦女子的な線の細いものでなく、線が大きく堂々としてゐた。勿論松岡に大に優つてゐた。

その晩、伊藤、岡野と僕とが晚餐に招かれた。松岡は「北君はオペラパー」としてどう感じた」と得意さうに問

本料理屋のスキ焼で晚餐を取つた。松岡全権の随員としては佐藤安之助少将(支那通)、鷺沢与四三、竹内克巳三君の外、如何なる資格か知らぬが畑桃作、吉川兼光等が附いて来た。外に新聞記者通信員が多数にゐた。文武の大官連はメトロポリタン・ホテルといふ一流のホテルを借り切つて宿つてゐた。岡野大佐と影佐少佐は別の安ホテルにゐたので、僕も岡野に誘はれてそのホテルに宿つた。建川將軍は、流石は陸軍の威勢を揮つて、立派なアパートの一フロアーを借り切り、フランス美人を連れ込んで、自動車三台ばかりを玄関先に備え付けてゐた。仲々豪勢なものであつた。

会場は大して広くもないが、二十名くらゐの収容力があつた。支那側はリットン報告書を配布してゐたので、会議の発端から、有利の態勢にあつた。十日の会議の初日に支那代表の顧維鈞が所謂田中メモリアル問題を持ち出し、田中内閣の時の東方会議当時、日

ふた。僕は答へた「僕は学校の先生だから採点の癖があるが、落第点はつけぬが、六十点精々だ。一体こんな会議場で豊臣秀吉だの、山田長政だのを持ち出して、欧米人では誰も知る者がないから、所謂空谷の鞏音である。僕ならば、在米の日本の同胞は移民中でも平和で犯罪のケースも尠ないし、南方のオランダ植民地も日本の武力に対して、日本を侵略呼ばりはしない。殊に日本は徳川の初めから日清戦争までの三百年間国内的平和は勿論のこと外国との戦争もしなかつた。こんな例は世界にない。日本人の本質は平和と秩序を愛することにゐる。支那だけが喋ぐのは不思議である。侵略といへば、ロシアの方が余計侵略してゐる。日本の満洲の権益はロシアから譲られたもので、支那とは関係のないものである。然るに支那が旅大回収など、喋ぐから満洲の秩序が乱れるのである。支那本土に比して満洲に一層の安定と繁栄があるではないか。日本の実力を離れ

本の世界征服の計画を造り、之を天皇に上奏したが、満洲事変はこの遠大な計画の第一段階であると滔々として論じ立てた。日本ではこの田中メモリアルは、田中を陥れんが爲めに、政敵が偽造したか、支那側で日本を攻撃せんが爲めに捏造したと断定され、何人も之を信する者が無いのに、顧代表が之をゼネバで持ち出したので、日本側はあつげに取られた。しかし、各国代表者殊に婦人の傍聴者は既に配附されてゐたリットン報告書を読んでゐるので、支那同情者が多く、日本に対する反感をそゝるに役立つた。まさか責任ある大國の代表者は内心之を真に受ける筈はなかつたと思はれるが、宣伝効果は百パーセントであつたと思ふ。

之に対して、松岡代表は二千五百年の全歴史を通じて、領土的慾望で支那征服を企てた者は豊臣秀吉の朝鮮征伐だけで、シャムへ移住した山田長政すら現地で非常な勢力を得たが、本國と結んで南方計略を企てなかつた。日本

て、安定と繁栄はあり得ないとでも答辯する」といつた。

松岡も豊臣秀吉や山田長政は強敵の攻撃に対して突嗟の間に出したらしいので、余り適切だと考へなかつたらしい。さうしてかういつた「北君はオペラパーだから、公平に物を見るかも知れぬ。僕が討論の際枝葉に流れた時は、君のいふ安定と繁栄の本筋に返すやう時々注意して呉れ賜へ」と。

顧代表は米國を知る割合には支那を知らない。松岡が支那の阿片問題を持ち出して、自分は支那全土を旅行したが、熱河でもどこでもケン栽培してゐるのを見たことがないと曰はくれられたこともある。相手としては仲々苦手である。

僕はゼネバに来ると直ぐ新聞広告でフランス語の女の教師を求める広告をやつた。十数名が旅館に来た。教育があり、綺麗げなものを二人選んだ。一人はゼネバの大学を出たもので地味さうな娘で聯盟に勤めてゐた。他はルーマ

ニアから来た新聞記者であつた。後の方が、遙かに伶俐で、英独佛三語をおやつり、哲学や文学にも一通り通じてゐた。ユダヤ系らしくあつた。僕は女新聞記者ならば、聯盟の討議につきて忌憚なき報告をやつて呉れると喜んだ。僕は結局佛語の教師兼スパイに利用したやうなものである。二人共一週二回づゝ来たが、大抵は教授が終ると晚餐を共にして、聯盟を中心に話し合つた元代議士の畑桃作が女を見旁々僕のホテルへ来た。外国語は一言も解らず人相も悪いので、女共に嫌はれた。松岡が何の爲めにこんな男を連れて来たかは解らぬ。多分たかられたのであらう併し僕は親切にしてやつたから僕には大に感謝してゐた。吉川兼光君も早稻田で一寸教へたことがあるので時々やつて来た。同君はチェコのベネスヤ支那代表や日本の石原、土橋等の陸軍側に反感を持つてゐた。殊に土橋中佐には決闘でもやらうかといつた程の反感を持つてゐた。僕はこゝならば軍もど

ストルもなからうから、やるなら今だと少々おだてたが、実現はしなかつた吉川は海軍側に好意を持ち伊藤述史には感謝してゐた。

聯盟の会場へ僕が出ると、家庭教師の二人の女が握手に来る。海軍の某大佐は僕にいつた。「僕等には碌なストリート・ガールも見附らぬのに、北さんは外国に馴れてゐるので到着早々えらい奴を二人も見附けたね」と妙に感心してゐた。海軍は海に許りゐるので陸へ揚がれば息抜きは木戸御免であるから、ゼネバでは相当困つた様であるそこへ行くと建川は流石陸軍の大御所である、フランスの美人をかゝえ込んでゐた。或る日建川の主催で、聯盟関係の外交官、陸海軍人、新聞記者、松岡の随員等を自分の豪華なアパートに招いて大盤ふるまいをやつた。僕は義兄の鈴木莊六大將とは早くから懇意であつたが、建川とは初対面であつた。建川は僕に会うと「君の兄さん一輝君とは前から懇意だが、君には始めてだ

一輝君はこわい顔をしてゐるが、君は温厚に見えるな」と初めから無遠慮だ僕も無遠慮にやつた。「將軍はパリから美人を連れて来てゐるさうだが、豪勢ですな」と聞くと、建川は「陸軍中將でまさかストリート・ガールといふ訳にはいかぬではないか。しかし連れて来てゐる女は老人では物足らぬから時々パリへ帰りがたがる。やつぱり焼けるな」といふ。僕すかさず、卓上のシャンパンの杯を挙げて、「老来益々健なるを祝します」と大きい声でやつたら、流石剛腹の將軍も少々きまりが悪くなつたと見えて、パリから来てゐた笠井少將と僕とを誘つて、これからドライブでもしようといつて、宴半ばにして郊外にドライブした。晩秋の山野は日本のそれとそっくりだ。將軍は一個師団くらゐ率いて演習をやるにはいゝなといつた。

ゼネバへ来て見ると、日本の陸軍は田舎者に感ぜられる。建川や石原は松岡を全権にするに骨を折つたらしいの

で、建川などは苟しくも全権であつた松岡を「松岡を呼べ」などと平気でいつて威張つてゐたし、石原は僕の兄の書いた「日佛同盟」のパンフレットをわざわざゼネバまで持参に及んで僕に向つて之に限るといつてゐた。僕は兄の書いたもので一番悪いのは日佛同盟のパンフレットだ。フランスには世界的規模の大産業、大貿易会社もない、小金があつて金融業を営む程度だ。殊に石油が乏しく、大海軍もない。陸軍が充実して財政状態がよいから、ヨーロッパの強国たることは事実であるが世界政策がなく、世界帝国は夢想だもされない。こんな国と同盟しても日本には何のプラスにもならず、先方も応ずる筈がない。唯日本と利害関係がないから仲良くは出来る。たゞそれだけだ。石原も兄の書いた物であるから僕が賛成すると思つたら意外の解答に驚いてゐた、陸軍の逸才といはれる石原にして尙ほ斯くの如し。以て知るべしである。

海軍側は軍縮問題で来てゐるので、満洲問題については一言も述べなかつたが、岡野大佐の胆入りで、永野、長谷川両中將と洪(?)少將と岡野君とで僕を招き一夕晚餐会を催し、僕に歐洲の民族主義運動の話させた。両中將も大に喜び、伯林でも両中將の招待を受けた。生涯交際する間柄になつた岡野君は佐官以下及び外務省の若手を集めて、度々僕の爲めに冥会を催ほし僕に忌憚なき意見を述べる機会を与へた。

松岡全権は、松平、長岡等の長老が居るにも拘はらず、余り相談せず、徹頭徹尾独善的であつた。伊藤君をば事務的に一番相談相手にしてゐた。僕は度々松岡に伊藤、岡野と共に晚餐に呼ばれたが、帰朝後の国内改造問題(政覚解消運動)について相談を持ちかけ又大演説の日の晩には、演説の出来栄えについて批判を求めたゞけである。僕は余り褒めなかつた。要するに侵略と自衛の問題である。支那側は侵

略と解し、日本側は自衛だと辯明するだけで、問題は簡明瞭である。

米國は國際聯盟の單なるオブザーバーであつたし、英佛も余り正面から日本を攻撃しなかつた。日本を正面から攻撃したのは小國の代表、殊にスペインのアドリアーガ、チェコの代表(當時外相)ペーニシュであつた。日本の新聞記者連は國際聯盟の權威がなくなると、小國は侵略の危険が多いから、聯盟規約の擁護に熱心であるとのみ解釈してゐた。之も一理あるが、僕は英佛の大國は小國を使嚇して喧ましく論じ立てさせると解してゐた。フランスは、ドイツの復興と復讐を惧れてゐたので、國際聯盟の規約の一条々々を楯に取つて動かなかつた。英國の代表は佛大表が余り拘子定規であるのでマクドナルドの名言「凡ての条約は神聖である、しかし何れの条約も永久的ではない」といふ風に、多少余裕があつた。独伊兩國も大勢には順応してゐたが、日本と置かれた地位が同様な

で対日本の攻撃には積極的ではなかつた。ソ聯は当時脱退してゐた。リットン報告の主リットン卿が出席してゐたので理事会議長アイブランドの首相デヴェラが、之を証人として發言させやうとしたが、松岡は彼は代表に非ずとの理由で發言を烈しく拒んだので、各代表は反感を持つたし、傍聴席の米國婦人などは極度の反感を現はした。

佛語教師兼情報係の二婦人は、松岡の日本新聞記者に評判のよかつた演説は、日本向け放送であるから、外人に悪評のあることを告げた。

三 イタリア旅行

僕はイタリアに二度目の美術行脚をやりたいのと、ファツシヨ政権十週年を迎へて聲望隆々たるムツソリーニ宰相にお目にかゝりたいのと、クロチエに次いで世界的哲學者の名声を馳せてゐる元文相ゼンチレに会ひ度い爲めに、聯盟理事会の終ると共に、十一月三十日ゼネバを立つてイタリアに向つ

者といはれた。彼はイタリア敗戦後兜漢に暗殺された。

日本大使館では、イタリア外交官で東洋方面に轉動する二人の送別会に僕をも招いて呉れた。先年団伊能君と一緒に泊つてゐた「ホテル・ロイヤル」へは下位君が度々やつて来た。アツチラがイタリアに侵入して、ポロニヤで毎日大酒を飲んで「快哉」「快哉」と叫んだといはる「エスト・エスト」(快哉の意味)といふ葡萄酒を注文して、嘗てのイタリア行を思ひ出した。数日後ムツソリーニからの使者が手紙を持つて来た。十二月六日が面会日と指定された。ホテルを出る時、使用人が列を造つて送つて呉れた。イル・ドツエの威望々々拳國仰ぎ見るものなき様であつた。「ヴェネチア」宮殿で二十分許りお目にかゝつた。この会見記も「文芸春秋社」発行の「話」に載つてゐるから、こゝには略するが、僕は東洋の安定と繁栄には日本の実力は常に考慮に置くべきことを述べたが、日

た。岡野と外一名の海軍將校が停車場まで送つて呉れた。ミラノに着いたのが同日午後八時である。ムツソリーニの誇りとするミラノの停車場は一九二〇年にミラノを訪問した時のものとは面目一新し、世界有数のものとなつてゐた。一日の午前ローマに着いた。直ちに大使館を訪ふたら、大使は不在で岡本参事官、秋山書記官、それに府立三中で教へてゐた当時の旧弟小川昇書記官がゐた。大使館にムツソリーニに会ひたいとの希望を述べて紹介を頼んで置いた。近來日本人で首相に遇つて、帰朝後選挙などに之を利用する連中があるので、先方も警戒して居り、鶴見祐輔君が来た時も相当の時日を要したとの事である。しかし、ゼネバの会議中でもあるし、ムツソリーニに満洲事変を話して貰ひたいといふので、僕に対しては極めて熱心に紹介の勞を執つた。旧友の下位君を尋ね、翌二日同宿の小野君に案内して貰つて、ゼンチレを訪問して、色々哲學上の談話を

本には非常に好意的であつた。ム首相は下位春吉とは往年別懇であつたが、下位は一時駐伊日本大使館と仲が悪くなつて、ム首相も下位と面会を避けてゐたので大使館でも下位のことはいはずに呉れといつたが、満洲事変後は大使館と下位の間も良くなつてゐたし、翌年の四月には下位の大使館の御用も済むので失職するから、僕は旧友の爲めにム首相に下位との面会を頼み、且つ翌年春は日本へ帰らせること断言したこの仲介が効果を奏して、僕が八年二月フランスより帰朝の途次、船がナポリに附くと、下位はムツソリーニが会うと知らせがあつたとナポリまで出て知らせて呉れた。僕は帰朝後下位君を帰國させる爲めに、故岩崎小弥太男や有賀長文さんに旅費を出して貰つて、下位一家を日本に迎へた。それで僕はゼネバで作つたマイナスを済すに相当困難をした。

四 再びゼネバに歸る

かわした。小野君が通訳して呉れる筈であつたが、先方はドイツ語が自由であるし、通訳なしで、互にドイツ語で話した。此のゼンチレ訪問記は、帰朝後「読売新聞」に書いたから、こゝには繰り返さないが、日本人がゼンチレを尋ねたのが始めだといふので非常に喜んで、数冊の書物に署名して呉れた。ムツソリーニに電話をして早く会うようにと伝へた。航空大臣ハルボの電話があつたのを、訪問の時間を延ばさせて約一時間話し会つた。予め独訳で彼の二三の書物を読んで行つたので、先方も愉快に堪えないやうだつた。

当時彼は大百科辞典編纂の総裁であつた。彼はクロチエの後輩であつたが、クロチエは「自由主義者の宣言」の發表で、今は隠棲してゐるから会はぬ方がよいと注意して呉れた。ゼンチレは有数なヘーゲリアンであり、教育改革に功勞あり、ムツソリーニ著の「ファツシズム」の執筆者も彼といはれる。寧ろムツソリーニの理論的指導

ローマ、フローレンスで美術を数日觀賞して、ゼネバに歸つた。岡野君伊藤君等が集まつて松岡全権と共に僕のイタリア行の話を聞いて呉れた。翌日の十二月十日には松岡全権のゼネバに於ける最大の演説があつた。前晩の食事の時、僕は松岡に向つて、「世界の輿論は変わるべし」との実例として二つの例を挙げたがよいといつた。一は、國際聯盟の成立は、ウィルソン米大統領の主張とその調印に依つたが米上院が反対して、米國は聯盟に加入しなかつた。世界の輿論は米の不信を鳴らした。然るに、其の後米國の憲法は条約の批准には上院の三分の二の賛成を要すといふことが理解されるに及んで、米國の不信を叫ぶものがなくなつた。之は世界輿論の変化である。第二の例として、トルコはセーブル条約を調印しながら、ケマル・パシヤがアンカラに兵を挙げ、スミルナの一戦でギリシヤ兵六万を殺傷し、一時ヨーロッパはトルコを悪魔の如く悪罵したが、ロザ

ンヌ会議でトルコが寛大の契約締結に賛成した爲めに、平和の天使の如く讃へられた。之も世界輿論の変化である。満洲事変につき早急に断定せず暫らく推移を見て呉れ、世界の輿論が変化するに相違ない、と述べてはどうかといつた。同席の笠間博士は同感の意を熱烈に表明した。

然るに翌日はどうか。「世界の輿論は変ずるかも知れぬ」と松岡が喝破したのはよいが、例証として掲げたのは「世界の輿論はナザレのイエスを磔刑にした。然るに今日は世界の輿論は彼を崇拜してゐる。日本は磔刑になる覚悟で毅然として立つ」。何といふ乱暴な引例であらう。世界各国の新聞記者は一齊に胃潰を非難した。彼を「日本の虎」「Tiger in Japan」と呼んだ。家庭教師の二人の婦人は僕のところへ来て何たる暴言かとあきれたのである。僕は松岡にいふた。あなたの議論はなつておらん。キリストを磔にしたのはユダヤ人であり、彼を崇拜してゐるの

は非ユダヤ人ではないか。これでは世界輿論の変化の例にはならぬ。あなたは西洋人の一番大切なキリストを盗んで、日本の爲めに防弾チョッキにしたやうなものではないか。将棋で敵の飛車や角を盗んで相手を苦しめるやうなものではないかと詰め寄つた。之には松岡も閉口した。

僕は松岡に向つていつた。石原が毎朝松岡の所へ来て、松岡さん、もう早く聯盟を脱退して日本へ帰らうと催促した。僕は松岡に向つて年末に脱退すると、世界列国が経済封鎖などをやると考へて、日本の経済界は乱脈になり、株価が十五億位は直ぐ降る。故に来春まで持ちこたへたらどうだ。あなたの法螺話を聴く爲めに、世界各国の千人以上の人数を引き止めて置くのも大成功ではないかといつたら、松岡も北君は時々うまいことをいふ。さうしようかと答へた。

フランスからクロードル將軍が来た將軍は植民地軍の総大将で、軍参事官

やつた。伊藤君は僕にいふた、今日くらゐ愉快なことはない。三人で飲んで、外のおえら方をボーイキョットしたと得意満面であつた。伊藤はこんな男であつたから、一生大使にもなれず了つたが、仲々浪人にもない面白い男であつた。この伊藤君はいつた。「北君は蔭ながら大に働いたが、松岡が一月の室代だした丈では気の毒である。三千元でも五千元でも、外務省の金をやらう」と。併し、僕のゼネバ滞在はフリーランサーとしてあるから、外務省の援助では具合が悪い。路銀を費い果したら三菱の伯林支店の飯野君は旧知の間柄だから、こゝで食ひ延ばしをやり、足らねば借金も出来ることとわつた。

さうして国際聯盟も目安がついたから、クリスマス休みを利用してドイツに出ることにした。岡野大佐も同道した。永野、長谷川両中将にはイタリイの芸術脚をやるやうに勧め、二人は自動車を出掛けた。下位春吉に柔

内を乞ふ電報を打つて置いたので、二人は下位の案内を受けた。後伯林で永野、長谷川両中将の御馳走になつた際永野中将は「北君に勧められてイタリイの美術を見たが、悠久の姿を見て、自分等の仕事つまらぬ事を知つた」と述懐した。僕はこの永野の言葉は今尚ほ耳に残つてゐる。

五 ドイツに入る

僕は岡野君と一緒にドイツに入つて旧住所のハイデルベルヒに着いて、オイロツペーイッシエス・ホテルに着いた。ホテルの玄關番は十数年前の僕を知つてゐて「プロフェッサ・ウィーダー」教授また来たのか」と叫んだ。僕は記念に米國製万年筆を呉れてやつた。旧下宿を訪ねて、お神や子供等に會ひ、友人ウィンクラー教授夫妻をホテルに招待し、岡野と二人でウィンクラー君に案内されて、近郊の森を散歩して、宗教哲學者の某教授を訪ひ、更に旧師リツケルトを訪ふた。老い果て

で、リットン委員團のフランス委員であつた。上海で伊藤述史が通訳し案内した因縁がある。伊藤君は仲々の変人である。僕に向つていつた。今日は松平大使やら、建川將軍やら、松岡やらがクロードルと会食したいと申し込んでゐるが、今日日本フアツシヨの北君とだけで食事をしようといつて、ホテルの中央の食卓で、三人だけで食事を取らうといつ

て、食卓についた。建川や松岡や松平がクロードルに握手に来た。ナボレオン一世が愛好したという「フィン・ナボレオン」(日本貨で一本二百円)を注文して三人で大に



昔時の面影がなかつた。

伯林に出て、三菱の飯野君の舍宅で食客となり、案内されて、旧知の駐日十年といふゾルフ大使にお目にかゝつた。当時はナチス運動も頂上に達してゐた。ゾルフさんは、ナチスは青年と無学者と貧乏人の集團だから天下は取れぬといふた。しかし、僕はハイデルベルヒでウィンクラー君からハイデルベルヒ大学生の七割がナチスで、一割が共産党で、二割が日より見たと聞いてゐたので、ヒットラーが天下を取る



と誇つてゐた。果せる哉、僕が翌年二月帰朝の途の船の中で、ヒットラー政権の成立を知つて先見の明を誇つた。年末をドイツで過ごし、一月末パリに出で、ベルグソンの宅を十三年ぶりに訪問し、マルセーユに行き、照国丸で日本に向つた。

ついでに述べるが、松岡全権は日本を出発する時国際聯盟を脱退しないと要路に盟つてゐたのを勢の激するところ遂に聯盟を脱退したのである。之は日本の上層部が英国に対して、日本は聯盟を脱退しないと確言してゐたので松岡がゼネベで、強がりをつけても英国が譲らなかつた爲めに、日本が聯盟脱退となつたのである。之は戦時中「国家保安法」が議会上程された時に、委員会で当時の兵務局長田中隆吉少将が述べたことで、委員長野村嘉六もこの法案に賛成したのである。因にいふ。犬養や西園寺が起訴されたのはこの法案の爲めである。

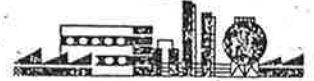
十二月十日松岡の大演説の際に面白

い挿話がある。松岡が演壇に立つ時、皇太后から頂いたカフス・ボタンを着け、石原が明治大帝着用「越中フンドシ」だといつて松岡に進呈したものを、松岡が着用し及んで、大演説をやつて、例の日本はキリストの如く磔刑の用意ありとの暴言となつたのである。松岡にしても、石原にしても、相当新劇的人物である。日本の破綻は斯かる奇狂な登場人物を得て可能であつたのだ。

未完

化学を通じて高度の生活文化を造る...

曹達薬品・無機薬品
有機薬品・化成品
油脂・農薬・医薬・金属



本社 東京都港区赤坂表町四ノ一
営業所 大阪市東区北浜二ノ九〇
工場 二本木・富岡・東京・会津

硫安・過燐酸・染料・医薬・工業薬品
アルミ・カーバイド・有機ゴム薬品

日新化学

本社 大阪市東区北浜五ノ二二
支社 東京都中央区日本橋本町二ノ六
工場 新潟・大阪・岡山・福岡・和歌山